

WONDER THOMPSON

written by HADEYA

1

ジム・トンプソン。知る者ぞ知るペーパーバッグ・ライター。伝説の暗黒小説家。俺が目標に掲げる小説家だ。言うまでもなく、トンプソンは特異な作家である。信用できない一人称の語り手／読者をおちよくった文体／異常心理と爆発的なフィナーレ。これらの要素によりトンプソンは〈安雑貨店のドストエフスキー〉と呼ばれるに至った。酒浸りの邪悪な物語によって、お高く止まった芸術をブツ飛ばし、文字通りペーパーバッグを芸術の域に高めたのだ。トンプソン崇拜者は後を絶たない。キューブリック、キング、馳星周、タランティーノ、そして俺——ハデヤ。骨のある作家はこぞってトンプソンを崇拜する。だが俺達はトンプソンの何に惹かれるのか？トンプソンの何に感動を覚えるのか？

答えは一つ。カタルシス、だ。

片足の不自由な少女が斧を振り回す時。異常なる殺人警官が妊婦を殴り殺す時。愛の破綻に瀕した夫婦がショットガンをブツ放す時。俺達はそこに底なしのスリルとカタルシスを見出すのだ。

俺もトンプソンのように書きたい。トンプソンのように暴れ、トンプソンのように死にたい。そう願ひ、自伝を書く事にした。今、貴方が読んでいる小説がそれだ。

ガキの頃からアート狂だった。俺が好むのは酒に例えるなら火の点くらムのような強烈なアート。ニーチェやバロウズなど外国産の過激なアートにどっぷり浸った学生生活を送り、社会人になってからも芸術漬けの日々は続く。いつしか俺は小説家になった。俺の小説はペーパーバッグだ。セックスと暴力に塗れた低俗な大衆小説を得意とする。ヘヴィでありながらポップ、ポップでありながらヘヴィ。そんなユニークな作品を連発しているのだが誰も作品を読んじゃあくれない。それもその筈。周囲は退屈な奴ばかりだからだ。働いて結婚して住宅ローンを組む。そう言った輩に俺の作品は理解できない。そう言った連中が好むのはそいつらの生き方同様、安全な芸術だからだ。俺の作品は彼等には危険過ぎる……。

意外にも俺の作品に理解を示したのは出版社だった。業界最大手のB社は俺の鮮烈な暴力美学を指摘し、F社は「アウトサイダーの人生を謳歌する貴方の作品は文学の真骨頂だ」とまで言ってくれた。N社は俺の作品に最高評価、Sクラスを付与した。

嬉しかった。死ぬほど嬉しかった。だが、この話には裏がある。

「出版したければ百万円払って下さい」

今日も俺は小説を執筆している。今日だけでなく死ぬまで執筆するだろう。金稼ぎや人気取りの為に書くのではない。自分が自分で在る為に書くのだ。世間一般のアーティストは芸術を好み、芸術を好む奴等の為に書く。やれ愛してるだの、やれ蝶々が飛んでいるだの。そして出版社は金の為に契約を交わす。悲しい事に、そうやって世界は成り立っているのだ。出来の悪いクッキーを見栄え良くパッケージしてベルトコンベアーで流通させちまう。どいつもこいつもクッキーを喰らい、然り顔で言いやがる——このクッキー、とっても美味しい！俺の作品は売れなくて当然だ。なにせ毒入りなのだから(ニヤリ)。

出版オファーは全て蹴った。百万も出すくらいなら、その費用を作品強化に回す方が得策と考えたからだ。そして決心した。最高にヤバい小説を書いてやろう、と。

-

*

俺は荒野にいた。荒れ果てた文学のスラムに。ここは完全なる実力世界。筋金入りの小説家が跋扈する黒インクと真っ赤な鮮血の世界だ。古びたビルの外壁に立ち小便をして時化たバーへ入った。客は疎らで、どいつもこいつも邪悪な面で酒を煽って嫌がる。

カウンターに座り、シングルモルトをオーダーした。ロックグラスを嘗め、店内を見回す。女っ気はない。こんな危険な場所に女子供が入ろうものなら、そいつは一瞬で骨と皮になるだろう。だから当然、女子供は寄り付かない。ところが、だ。女が現れた。信じられない程の美女が。白人で若く、セレブ宜しく金の掛かった身形をした女。明らかに未成年。バー慣れしていないせいか、オドオドした様子で店内をキョロキョロ見回している。

野郎二人が出口のドアを塞いだ。残忍な目をした黒いスーツの百貫デブが立ち上がった。

「姉ちゃん、パコパコしようや！」

女は顔を真っ赤にして逃げようとした。だが出口は野郎二人が塞いでいる。デブは女に接近し、酒臭い息を浴びせた。

「逆らったらカづくでケツの穴にトウモロコシを突っ込んでやる」

女は必死に抵抗した。それを嘲笑うかのようにデブは女を手荒く殴った。女は派手に倒れ、足元に転がった。

「お願い、助けて！」

女は俺に助けを求めて来た。事もあろうに俺様に。俺は黙ってシングルモルトを口にしていた。ヤバい目付きのデブが俺の背後に回る。拳銃を手にして嫌がる。

「兄ちゃん、そこをどきな」

「助けて、お願い！」

「どけつつてんだよ！」

デブが俺の肩を掴んだ。その手首を俺の右手が掴む。

「くっ……は、離せ！」

「気安く触るんじゃねえ、チンピラ。一張羅が皺になるだろうが」

言うなり懐からナイフを抜いた。シュツという風音と共に目にも止まらぬスピードで心臓を抉ってやった。ナイフを抜き、左手でデブを一押しして仰向けに倒した。

「なあ、姉ちゃん——」

俺は言った。女は信じられないと言った面持ちで成り行きを見守っている。

「ここはあんたの来る場所じゃねえよ。あんたはビバリーヒルズやディズニーランドにでも住むべきなんだ」

「……み、道に迷ったの」

「どこに行くつもりだった」

「セ、セイフティ」

セイフティ——ベストセラー作家御用達の文壇バー。笑っちまった。

「憧れの小説家に股を開こうってか。まあいい。セイフティまで連れて行ってやるよ」

「あ、ありがとうございます！」

-

俺達はボロいフォルクスワーゲンで隣町の〈セイフティ〉を目指した。助手席の女はなおも青褪めた顔をしている。煙草に火を点け、俺は尋ねた。

「名前は？」

「……沙良です」

「年は？」

「17」

「小説が好きなのか？」

「小説家志望なんです。セイフティでコネを掴もうと思って——」

「セクシな格好をして来た訳だ」

沙良は俯いた。下を向き、メソメソ泣き出した。

「小説家になりたかったらセイフティなんかじゃ近付くな。本物の小説は身近にあるんだ」

「……ど、どこに？」

「心の中だ。ジム・トンプスンって知ってるか？」

「……いえ」

「ペーパーバッグを芸術の域に高めた第一人者だ。彼の作品を初めて体験した時、俺は底なしの感動を覚えた。セイフティじゃ味わえないヤバい感動を」

沙良はじっと耳を傾けている。ブレーキを踏んだ。サイドブレーキをロックして彼女に拳銃を向けた。

「な、何をするんです？」

「小説家になるのか、ならないのか？」

沙良はゴクリと唾を飲んだ。そしてワンワン泣き出した。

-「良い子にしてろよ」

そう言って俺はポケットから覚醒剤の入った袋を出した。白い粉末を指先に盛り、沙良のパンツへ挿入する。

「あ、ああっ！」

凄まじい喘ぎが車内を貫いた。淡々と俺は告げた。

「これがトンプスンだ」

「こ、こんなの初めて！」

沙良は馬のような荒い鼻息で俺の上に被さった。ペニスを引っ張り出し、自ら挿入すると狭い運転席で腰を振った。俺達はガンガンガン、ファックした。

「燃え盛る火鉢に白い重油を注ぎ込んで！」

叫びながら沙良が絶頂に達した。感動してるに違いない。沙良は白目を剥いて華奢な身体をピクピク痙攣させている。オーマイ・ゴッド！

*

これが俺の小説だ。あんたも一発、決めたらどうだい？(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872